跡見学園女子大学

卒業論文ポスター発表会

2013年度　第1回　発表論文集

実施：2014年 2月20日

場所：跡見ギャラリー

跡見学園女子大学 文学部 臨床心理学科

ごあいさつ

文学部臨床心理学科の新たな試みとして、卒業論文ポスター発表会が開催されることになりました。卒業論文は学生の皆さんにとって４年間の学修成果の集大成であり、大学で学んだことの証となるものですが、これまでは、その到達度を自ら検証する機会がありませんでした。広く参加者からの意見、批評を聞くことができるポスター発表会は、その意味で、有意義な企画だろうと思います。他者の評価に耳を傾けることが、さらなる学び、研究への第一歩となるよう願っています。

跡見学園女子大学文学部長
小仲信孝

「卒業論文ポスター発表会」第１回が開催されることに、大きな期待があります。４年生が進めてきた研究のプロセス、成果を同級生、また後輩や保護者等のみなさまと共有できることは、とても意義深いことと思います。

跡見学園女子大学臨床心理学科主任
山口豊一

企画趣旨

臨床心理学科教授　藤澤伸介
臨床心理学科教授　野島一彦

跡見学園女子大学文学部では、平成22年度カリから卒業論文が必修になり、今年度は必修最初の学年が卒業論文を仕上げた記念すべき年度になります。

臨床心理学科ではそのことを記念して、本年度から「卒業論文ポスター発表会」を開催することに致しました。

卒業論文は、学生にとって初めての研究体験の機会であり、各自が熱心に取り組みましたので、その成果を公開し、お互いの努力を讃え合い、これから論文作成に取りかかる後輩たちの参考にも供したいと考えています。

このような趣旨で、参加することにこそ意義がありますので、特に優秀者を選抜するということは、致しませんでした。専門家の視点からは、拙いと思われるものがあるかもしれませんが、温かい目で見守っていただければ幸いです。　臨床心理学科野の４年生は 121名で、９名の教員が15名ずつ卒論指導を担当しており、今回の発表は20名ですから、会場で御覧になれるのは全体の６分の１に過ぎません。発表は任意参加としたため、初年度でもありこの数になりました。

来年度以降、発表者が増えることを、期待しています。今年度は臨床心理学科のみの先行実施となりましたが、今後は他学部他学科の参加も得て、恒常的な教育活動の一環へと発展していくことを、期待しています。

２０１３年度卒業論文　　２０１４年2月20日

ポスター発表一覧

《 奇数番号：10:40 ～ 11:20　偶数番号：11:30 ～ 12:10 》

学習・認知・知覚

P－01　電車内座位者による傘の持ちと服装の関係
— 道徳性の自己学習を考える —　……長岡茉実

P－02　駅のホームでの並びかたに見られる男女の違い
— 空間認知における性差との関係 —　……青木美子

P－03　マクドナルドの店内滞在状況と所在地域人口との関係
— 時間取り戻しシステムの可能性 —　……牧野紗彩

P－04　飲食店における一人客の行動に見られる男女差
— 「ついでの行動」をどう認知するのか —　……鈴木友佳里

発達・教育

P－05　遊び場面における子どもの欲求と母親の行動
— attachmentとbonding の視点から —　……金子靖子

P－06　電車内における乗客の行動
— 手持ちぶさた状態の行動分析 —　……日高里美

P－07　家庭環境と学校生活スキルの不登校傾向との関係
……菱沼郁佳

P－08　進路決定に関わる経験と
進路決定自己効力・無気力との関連について　……奥田奈津子

P－09　思春期と拒食症との関係性についての考察
……文屋香純

社会・感情・性格

P－10　スター時代とアイドル時代のインタビュー比較
— ファンと編集者は変化しているのか —　……渡邉彩乃

P－11　おしぼりの使用後処理行動
— 原因帰属への試み —　……影山明日香

臨床・障害

P－12　カウンセラーの特性が
メールカウンセリングに及ぼす影響の基礎的研究　……小久保綾乃

P－13　青年期後期女子における発達障害児子育て不安
……鹿子田睦月

P－14　鉄道人身事故の発生傾向
— 自殺予防を考える —　……小野こずえ

原理・方法

P－15　犬への装飾行為と愛情の関係
— 新しい犬人関係心理学の提案 —　……小笠原弘美

産業・組織

P－16　新聞折り込みチラシの配布傾向分析
— 曜日に注目したマーケティング心理学的考察 —　……遠藤史織

P－17　メガネ店内における探索購入から見た買い物客の求めるサービス
— 販売側と購入側の認知差の視点から —　……鶴田祐輝

P－18　ジーンズ購入行動に見られる性差、年齢差、同伴者の有無
— 選択行動の色彩心理学的考察 —　……野口希美

P－19　カフェ利用客は何をしているのか
— カフェ選択における心理的モデルの提案 —　……佐藤加苗

犯罪・非行

P－20　駅前シャッターにおける落書きの色と場所の考察
— 「落書き」の心理学的研究（2） —　……門倉未来

電車内座位者による傘の持ち方と服装の関係

—道徳性の自己学習を考える—

長　岡　茉　実
（跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科）

問　題

筆者は人間がどのように道徳性を獲得していくのかに関心を持っている。道徳性といっても色々な面を持っているが、特に公共の場におけるマナーに、ここでは注目したい。

マナーの獲得に関する研究はあまり進んでいないが、人は経験によって学習することは多いので、社会的迷惑を蒙った経験からマナーを学習することもあり得るだろう。

そういう問題意識のもとに、本研究においては、車内の傘の持ち方に関するマナー獲得に焦点をあて、その実態を明らかにしていきたい。

目　的

本研究では観察調査を行って、電車内で着席している人の傘の持ち方がどのようなものであるかを調べる。また、傘の持ち方とボトムスの種類に何らかの関連があるかどうかも、あわせて調べる。

方　法

調査方法は雨の日、電車内で観察調査を行った。調査項目は、1.性別、2.ボトムスの種類、3.傘の種類、4.傘の位置、5.傘の持ち方、6.傘が閉じられているか、7.手もとの形の7種類である。

結　果

結果は、筆者が調査した中では23種類の持ち方が観察された。男性よりも女性の方が多様な持ち方をしており、それは主に折りたたみ傘に見られる事であると分かった。また、女性は男性よりも足を使って傘を持つ事が多いとわかった。一方男性は生布の部分を持っている事が多いとわかった。

ボトムスについては男性も女性もスラックスが一番多かった。女性はスカートを履いていて、傘を足で挟むことがあるとわかった。

TABLE　1は結果から分かった傾向を表にしたものである。男性における傾向よりも、女性における傾向の方が多いということがわかった。

TABLE　1　傾向のまとめ

3分の2の人は、手もとを持つ、手もとを手すりの内側にかける、露先を持つ、の3つのうちのどれかの持ち方をしている。
男性はビニール傘を使いやすい。
男性は傘を直接持たない傾向がある。
男性はビニール傘を足の間に置く傾向がある。
男性はビニール傘を手で持つ傾向がある。
女性は洋傘を使いやす。
女性は傘を直接触れている持ち方が多い。
女性は傘を足で挟む傾向がある。
女性は洋傘を足の間に置く傾向がある。
女性はスカートよりもズボンを履く傾向がある。
女性はスカートを履いているのにも関わらず、傘を足で挟む。
折りたたみ傘を使う女性は男性よりも多様な持ち方をする。
女性は折りたたみ傘を直接持たない傾向がある。
女性は手もとが？の形の折りたたみ傘を使う傾向がある。

考　察

全体的に見て、女性は傘を足で挟む傾向があるとわかったが、その理由はスマートフォンを操作しているからではないだろうか。筆者は観察をしていた時に、女性は男性に比べてスマートフォンを操作している比率が高い印象があった。しかし今回の調査では、電車内における作業行動を調査していないので、足で挟むこととスマートフォンが関係あるかは断定出来ない。今後の調査が必要である。

引　用　文　献

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆　(1999). 社会的迷惑に関する研究(1)　名古屋大学教育学部紀要(心理学),　46,　53-73.

注)　2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

駅のホームでの並びかたに見られる男女の違い

—空間認知における性差との関係—

青木　美子
（跡見学園女子大学 文学部臨床心理学科）

問　題

現在、男女の行動には差があると言われているが、従来の心理学の研究においては、その差がないものと考えるのが主流である。しかし、本研究では、こうした男女の行動の差が本当にないのかを確かめる為に、駅のホームでの整列行動を観察調査することにした。また、なぜこうしたことが起きるのかに関して、「能力の差理論」、「パーソナルスペース理論」という、２つの理論を検討することとし、並び方における男女の差が、どちらの理論によってうまく説明できるかを分析した。

目　的

行列の作り方は男女によってどのように異なるのかを、駅のホームでの整列行動を観察調査することによって、そこにどのような原則が働いているかを考察する。

方　法

電車の駅５箇所を選びそこのホームにおいて観察調査を行った。対象は、６３本のホームで電車待ちをしている人々３９３名とした。但し、朝の通勤時間は避けて行った。

また、駅のホームでの並んでいる人を３群に分類した。１つ目は枠内に並んでいる者。２つ目は並んでいるつもりだけれども、枠内からはみ出して並んでしまっている者。３つ目は非整列者である。この３つの並びかたの例は図のとおりである。

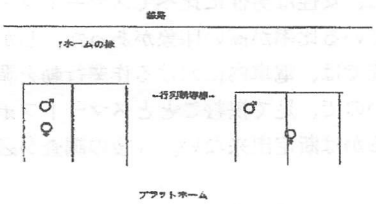


Figure 1 枠内に並んでいる人の例

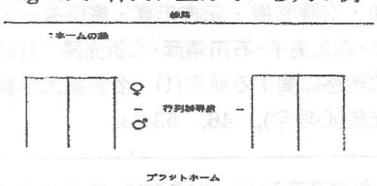


Figure 2 並んでいるつもりの者の例

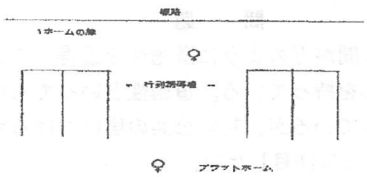
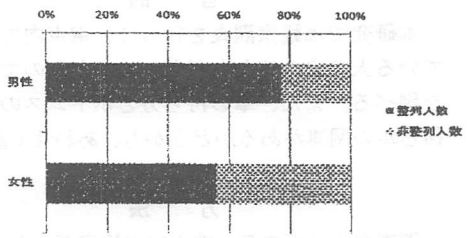


Figure　3　非整列者の例

結　果

枠内に並んでいるのは男性が多く、女性の方が少ないという結果になった。大手町駅では混在率は３０％であり、列中の男性比率は５９％であり、列中の女性比率は４１％であり、整列比率は１５％であった。列中の整列率は女性よりも男性の方が１８％高いという結果が出た。



考　察

男性は整列率が高く、枠内に並んでいることが多いことが分かった。一方、女性は整列率が低く、枠内に並んでいることが少ないことが分かった。従って、パーソナルスペース理論は棄却され、能力の差理論が概ね支持された。

今後の研究においては、整列指示枠に並んでいる人と、枠外にはみ出している人が同一グループとみなされる場合、到着順序の記録があれば、整列意図がより明確になり、より男女差が鮮明になると考えられる。

引用文献

Pease,A.d Pease,B.(2001).Why men don't listen and women can't read maps.orion Books Ltd.

注）２０１３年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

マクドナルドの店内滞在状況と所在地域人口との関係

—時間取り戻しシステムの可能性—

牧　野　紗　彩
（跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科 ）

問　題

筆者はファストフードの代表格とも言えるマクドナルドのように、最も心理学に基づいたマーケティングの工夫をしていると言われている店でも、食べ終わったにも関わらず席を立たずに在店し続ける人が多くみられることが気になった。

そこで、マクドナルドの店内滞在状況と所在地域人口との関係を見ることで、回転率を上げることが重要視されるファストフード店であるマクドナルドと食べ終わったにも関わらず席を立たない人々との関係を調べたい。

目　的

マクドナルド店舗内において客の出入りを観察することにより、①店舗によって座席占有率に大きな差は見られるのか、②座席占有率とそのマクドナルドがある区の昼間の人口とに何らかの関係があるのかどうかを調べる。

また、平均在店時間と座席占有率はどのような関係になっているのか調べる。

方　法

調査は平日に行い、観察時間は 12:00~19:00 の間に入店し観察が終了するまでとする。

店舗と座席は無作為に選び最低 1 時間在店し、座席から見える範囲の座席の客の出入りを観察する。

また、筆者の在店時間が 1 時間経過し、入店から退店まで観察することが出来た客が 10 人に達した時点でそのマクドナルドでの観察を終了する。

結　果

一人当たりの在店時間が長い区と昼間人口の多い区は高い相関関係を示した。

また、各店舗の所在区ではない地域から各店舗の所在区に働きに来ている人が多いほど店舗の座席占有率の割合が大きくなる傾向を示した。反対に、昼夜間人口の差が小さく、地元で働いている人や自宅が職場である人が多い地域にある店舗は単位時間当たりの座席占有率の割合は小さく、店舗が混雑している状況は少ないということがわかった。

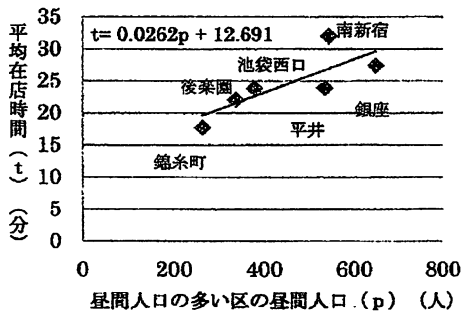


Figure 1　一人当たりの平均在店時間と昼間人口の多い区の昼間人口の関係

考　察

結果を総合すると、地元で働いている人や自宅が職場である人と都内他地域や他府県から通勤している人との違いは通勤時間の差であることが考えられ、通勤時間により削られた自分の時間を待ち時間の短いファストフード店を利用することにより埋め合わせたいと考えている、ということが示唆された。

引　用　文　献

一川誠(2008)　大人の時間はなぜ短いのか　集英社新書

Mannell,R.C.,&Kleiber,D.A.(1997). A social psychology of leisure. State College：Venture Publishing.（マンネル,R.C.,&クリーバー, D.A. 清水　敏彦（監訳）(2004) .レジャーの社会心理学　世界思想社）

注) 2013 年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

飲食店における一人客の行動にみられる男女差

―「ついでの行動」をどう認知するのか―

鈴木　友佳里
跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科

問　題

筆者は「一人客」が企業戦略の１つのターゲットとして注目を集めていると感じている。本研究では一人でお店に来店し、一人で食事や作業をする人を「一人客」と呼び、飲食店における一人客の行動特性を調べることにするAllan & Barbara Pease（2001）によれば、様々な場面において男女差はみられるということが明らかになっている。そこで筆者は一人客が多く集まると思われる飲食店に注目し、一人客の行動に男女差はみられるのか、みられるとしたらどんな差があるのか、先行研究がなかったことを踏まえて調べたいと考えた。

目　的

一人客の男女差を調査し、各項目において男女差はみられるのか調査する。

方　法

今回の調査は観察調査である。

調査内容は、サンマルクカフェ、エクセルシオール、スターバックスの３店舗にてそれぞれ10店舗ずつ計30店舗調査した。以下サンマルク＝ＳＡ、エクセルシオール＝ＥＸ、スターバックス＝ＳＴとする。３店舗に来店した一人客の男女で、年齢・性別・年代・店内での過ごし方・在店時間・荷物の置き方の４項目において調査を行った。調査方法は、時系列の調査用紙を用意し、記号を用いて調査対象者の性別、年齢や、食事、といった調査項目を記入した。

結　果

Table 1 と Table 2 を比較してみると男性は60分未満の在店者が32.1%なのに対し、女性は64.5%と女性の方が在店時間は短いことがわかった。一方60分以上の在店者においては男性が67.9%なのに対し、女性は35.2%と男性の方が在店時間は長いという結果であった。性別を除いた結果は60分未満も、60分以上も人数の差は見られないが、性別ごとにみてみると、男性は60分以上の在店、女性は60分未満の在店ということがわかった。

Table 1

男性の60分未満在店者と60分以上在店者の比較(%)

	60分未満	60分以上	合計
SA	4(19.0)	17(81.0)	21(100)
EX	15(42.9)	20(57.1)	35(100)
ST	7(28.0)	18(72.0)	25(100)
合計	26(32.1)	55(67.9)	81(100)

Table 2

女性の60分未満在店者と60分以上在店者の比較(%)

	60分未満	60分以上	合計
SA	24(55.8)	19(44.2)	43(100)
EX	18(72.0)	7(28.0)	25(100)
ST	26(70.3)	11(29.7)	37(100)
合計	68(64.5)	37(35.2)	105(100)

考　察

在店時間の結果において、男性は60分以上の在店者が多く、女性は60分未満の在店者が多いという結果であったことから、男性は飲食店に仕事を女性は休憩をしに来店しているのではないかと筆者は推測している。企業は女性の社会進出と一人客の増加を結びつけて考えているが、World Economic Forum（2013）によれば、日本は女性の社会進出がほとんどできていない国という統計結果もでている。在店時間も女性の方が短かったことから、女性の社会進出は進んでいないということがいえるのではないだろうか。また、一人客の観察調査によって「ついでの行動」が多くみられた。食事にプラスした作業内容だけでなく、飲み物を注文することで、店内に自分の空間を確保し、作業を行う人もみられたことから、「ついでの行動」に対する認知差があることもわかった。

引用文献

Allan& Barbara Pease(2001).Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps. Orion Books Ltd

World Economic Forum,(2013).The Global Gender Gap Report. World Economic Forum

注）2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

遊び場面における子どもの欲求と母親の行動

—attachment と bonding の視点から—

金　子　靖　子

(跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科)

問題・目的

これまで母子関係に関する研究が様々行われ、特定の場面や遊具を用いた研究が多くあげられてきたが、日常的な場面での研究がほとんどなされていない。しかし実際の母子関係は、日常生活の中で築かれるものなので、日常的な子どもの遊び場面の調査を行う必要があると考え、日常の一場面である「公園」を研究場面に選び、母子の行動を観察することで子どもの欲求がどういったものであるか、母親の反応や自発的な行動が子どもの欲求に関係するのかを観察法を用いて調査することで、更なる母子関係の発展につなげる。

方法

調査は観察法を用いて、日常生活で使われる公園で遊ぶ 1〜5 歳の子どもと、その母親の行動を記録する。記録用紙は、独自に作成した記録用紙②を使用し、子どもの欲求行動を「行動欲求」「身体接触」「介入」「反応欲求」「共同注目」「共同行動」の 6 つに分類した。観察時間は 1 組あたり 30 分である。

母親の反応は「◎」「○」「△」「×」に分類し、子どもの欲求行動と同じ項目で、母親の自発的な行動も記録した。

結果

母親の反応は「介入」や「共同欲求」に対して欲求を満たす反応がよく見られ、「行動欲求」「反応欲求」ではその反応が低く、「身体接触」と「共同注目」は中間程度であった。(Figure 1)

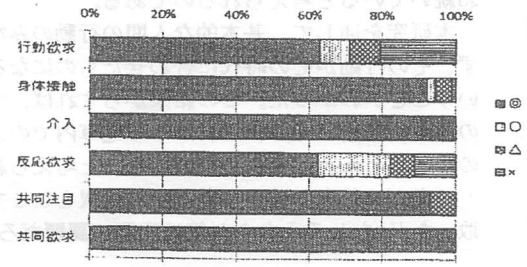


Figure　1　母親の反応内容の割合

子どもの欲求行動は「行動欲求」「身体接触」「介入」「反応欲求」「共同注目」「共同行動」順にみられ子どもの欲求行動と母親の自発的な行動には r=.94 という強い正の相関があることが分かった。

考察

母親の反応と子どもの欲求行動では、母親の積極的な関わりと共通体験の程度に応じて母親が、子どもの欲求に合致する反応を示す割合が異なることが分かった。

「共同注目」は母親からの働きかけの方が数値が多くなったが、矢藤(2000)と北山(2005)の文献から、遊びの中で行われる母子のコミュニケーションとして予想していないものが含まれていると考えられ、それを除いて再度相関を調べたところ、r=.96 になりさらに相関が高くなることが判明した。

子ども達は遊びの中で、遊びに関する欲求も発していたが、母親と一緒にいなかった時のことや自分が感じたことを伝えたり、態度で示す行動が見られ、言語コミュニケーションが未発達の子ども達にとって、遊びを通すことで自分を表現することができたり、子どもが主体となる遊びの場面なので、子どもの欲求を受け入れやすくなることで、「母親から受け入れてもらえる」という感覚を味わえ、安定した母子関係を築く基になると考えられる。

母親は、子どもの遊ぶ姿を普段から注目することで、些細な変化に気づいてあげることができ、子どもへの関わりが積極的になれば、子どもの欲求に対して肯定的な反応を多くすることができ、よりよい母子関係につなげられる。

引用文献

北山修(2005).　共視論　講談社

矢藤優子(2000).　子どもの注意を共有するための母親の注意喚起行動：おもちゃ遊び場面の分析から　発達心理学研究，12 巻，3 号，153-162.

注) 2013 年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

電車内における乗客の行動

—手持ちぶさた状態の行動分析—

日 高 里 美
（跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科）

問　題

電車内で人間は一体何をしているのか。実際に乗ってみるとわかるが多種多様である。

これまで、電車での人間の行動についての研究はなされてきたのだが、そのほとんどが電車内での化粧や公共マナーに関係したものであった。例えば、米澤（2001）の「電車内で化粧をして、完成した顔ではなく自己を表現するものとして化粧のプロセスを見せる」とするものがある。

このため筆者は、「化粧やマナーではなく、電車内で人間はまず何をしているのか」という根本的な人間の行動を調べることが必要だと考えた。

目　的

公共交通機関である電車には、どのような人が、どんな目的で、何をしながら乗っているのかを明らかにするために、個人としての乗客の行動を観察調査によって調べる。

方　法

2013年3月1日～6月1日の4ヵ月間で、電車の乗客の作業行動を座位立位別・年齢別・乗車目的別に観察して記録をする。

まず年齢の区分は「青年(15～30歳)」「中年(31～60歳)」「高年(61歳以上)」とし、人数は3つの年代それぞれ100人ずつ、合計600人を調査する。

そして作業行動項目は「携帯」「ゲーム」「読み物」「睡眠」「勉強・書き物」「音楽・ラジオ」「何もしない」「二つ以上」と8つに分ける（アンダーラインは作業行動の動的と静的の区別）。

次に乗車目的項目は、服装・持ち物などから判断し「仕事」「通学」「行楽」「その他の移動」と4つに分けることとする。調査対象は「二人以上の会話」を避けるため、個人の乗客に限る。

結　果

電車内での人間の行動は、筆者が予想した作業行動にほぼ分類された。また、先行研究で「化粧」の研究が多い中、筆者が実際に調査した時は「化粧」をする人に出会わなかった。

しかし、年齢による変化が顕著に見られた。

Figure 1は立位者の、動静差を年齢別に比べたものである。これを見ると、青年から高年になるにつれて電車内での動的行動が減少し静的行動が増加、逆に高年から青年になるにつれて「動的行動」が増加し、「静的行動」が減少するということがわかった。

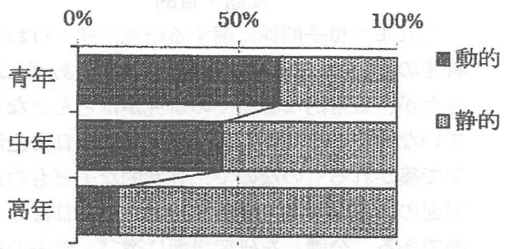


Figure 1　立位者：年代別作業行動の動静差

考　察

上記の結果を分析すると、年齢による作業行動の動静差に大きな変化が見られた原因として「高年は、何もしていないのではなく考え事をしている」、逆に青年の「考えることの減少」という問題が浮上する。

これら年代別の変化については、その時代・社会の変化が関係していると考えられる。投票率の低さから見る国政無関心や、生活に不便がない状態などの社会的理由により「考える」ことが減り、電車内での青年は頻繁に何かをしている。逆に高年は、自身が若かった頃の日本はまだ成長段階であり、「今より良く」という向上心のもと「考える」ことを頻繁に行ってきた。それが歳を取ってもなお続いていると考えられるのである。

本研究を通して、基本的な人間の行動のみならず、その行動がその時代に合わせたものになるということがわかった。この結果からすれば、今後の社会の変動に伴い、これからの電車内での人間の行動はどんどん変化していくものと考えられる。

「考える若者の減少」とみなす解釈をここでは取ったが、もしそうなら対策は喫緊の課題だろう。

引　用　文　献

米澤泉(2001).「化粧センス」を競う女性たち、化粧文化、41,20-25

注）2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

家庭環境と学校生活スキルの不登校傾向との関係

菱沼　郁佳
跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科

問題

不登校の定義は，「年間 30 日以上欠席した児童生徒のうち，病気や経済的な理由を除き，何らかの心理的，情緒的，身体的，あるいは社会的要因・背景により，児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者」（文部科学省児童生徒課 「不登校の現状について平成 21 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果）とされている。文部科学省(2009)の「調査速報値」によれば,平成 20 年度間に年間 30 日以上欠席した小学生は,22,652 名(小学 6 年生が 7,727 名)であるのに対し,中学生は 104,153 名(中学 1 年生が 23,149 名)と,小学 6 年生と中学1年生を比較すると,約3倍の増加が認められている。

目的

近年，不登校という言葉をよく耳にすることが多い。私は，不登校の家庭環境（家庭の環境の変化・親子関係）・学校生活（対人関係・学習）と大きく関わっていると考える。本研究では，家庭環境（家庭の環境の変化・親子関係）・学校生活（対人関係・学習）が不登校に具体的にはどのような影響があるかについて調べる。

方法

対象：跡見学園女子大学の大学３年生,大学４年生女子１１０名（臨床心理学科，人文学科，現代文化表現学科，マネジメント学科など）。

調査方法：以下の尺度で質問紙調査を行った。

①「親子間の信頼感に関する尺度」（酒井，2005）およびフェイスシートでたずねた。

②「登校回避感情測定尺度」（渡辺・小石，2008）で調査した。

③「不登校傾向尺度」（五十嵐・荻原，2004）で調査した。

結果

「家庭環境」「不登校傾向」等と＜同居・所属＞との関係は認められなかった。「学校生活スキル尺度の下位尺度」の＜所属＞による t 検定の結果，「学習スキル」(t=1.334,df=110,ns),「進路スキル」(t=-.348,df=110,ns),「集団スキル」(t=1.006, df=110,ns),「健康スキル」(t=2.157,df=110, p<.05),「コミュニケーションスキル」(t=-.157,df=110,ns)であった。有意差があったのは「健康スキル」だけであり,臨床心理学科は，それ以外の学科に比べて「健康スキル」が高かった。

考察

臨床心理学科の学生は，「健康スキル」が,それ以外の学科に比べて高いことが分かった。「健康スキル」には,心の健康・体の健康など人によってとらえ方は異なる。「学習スキル」,「進路スキル」,「集団スキル」,「コミュニケーションスキル」は臨床心理学科とそれ以外の学科に有意差がなかった。つまり,この 4 つのスキルに関しては,＜所属＞でスキルの差がない。「健康スキル」に関して，臨床心理学科の人が高かったのは，特に学校の授業で心の病について学ぶ機会が多く，心の健康に気を遣う人が多いからではないかと考えられる。

引用文献

① 五十嵐哲也・荻原久子(2004).「不登校傾向尺度」サイエンス社
② 飯田順子・石隈利紀(2002).「学校生活スキル尺度」サイエンス社
③ 岸田幸弘(2012). 不登校のきっかけと教師による支援　学苑社
④文部科学省児童生徒課「不登校の現状について平成 21 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果

2013 年度卒業論文　指導教授：山口先生

進路決定に関わる経験と進路決定自己効力・無気力との関連について

奥田奈津子
（跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科）

問　題

Bandura（1977）が提唱した自己効力を、進路関連領域に導入した研究の中に、「進路決定自己効力」という用語がある。これは、個人が進路を選択・決定するにあたり、必要な課題を成功裡に達成できるという信念のことである（Betz, 2001）。

今日、若年者の就職状況から、キャリア教育の重要性が問われている。その中で、測定可能な「進路決定自己効力」は、キャリア教育やキャリアカウンセリング実践の評価指標として期待されるものである（富永, 2008）。しかし、これまでの研究では、発達的な視点からアプローチされた研究は数少ない。また、一般的な自己効力の発達との関連を考慮した研究も多くはない（富永, 2008）。

目　的

本研究では、Bandura（1977）の自己理論の、自己効力の形成に影響を与える4つの情報源である行為的情報（実際に所与の課題をやってみる）、代理的情報（他者が課題を遂行するのを観察する）、言語的説得の情報（言葉による説得、自己暗示）、生理的喚起の情報（生理的な反応の変化を経験する）の考え方を踏まえ、現在までの進路に関わる経験の有無が、「進路決定自己効力」に影響を与えるとして、発達的な視点から、一般的な自己効力との関係を調査、検討することを目的とする。

方　法

質問紙法（有意抽出・縁故型）を用いた。

1. 調査対象者

大学生（A大学・B大学学生）男女193名

2. 調査内容

「進路決定自己効力」を浦上（1995）による進路選択に対する自己効力尺度で測定した。次に、「無気力感」を、下坂（2001）による無気力感尺度で測定した。最後に、進路決定に影響を与えたと思われる経験を、小学校から大学までと、その他（浪人期、大学以降など）の各時期について、自由記述してもらった。これらを集計し、SPSSを用いて分析を行った。

仮説1：進路決定に影響を与えた経験があれば、「進路決定自己効力」は高くなる。

仮説2：早期に進路決定に影響を与えた経験があれば、「進路決定自己効力」は高くなる。

仮説3：たとえ進路決定に影響を与えた経験があったとしても、もし「無気力感」が高ければ、「進路決定自己効力」は低くなる。

結　果

初回の分析では仮説1、2、3のどれも支持されなかった。ただし、「進路決定自己効力」と「無気力感」の間にかなり強い負の相関関係があることは分かった。また、自由記述から、経験ありの群をポジティブ経験群とネガティブ経験群に分け、t検定を用いて各得点の差異を調べたところ、「進路決定自己効力」の得点は、$t(102)=4.77$、$p<.05$、「無気力感」の得点も、$t(102)=-3.17$、$p<.05$であり、どちらも5%水準で有意であった。よって、再度分析を行ったところ、仮説2、3は同様に支持されなかったが、仮説1は支持された。そこで、「進路決定自己効力」の高群と低群の自由記述の内容を、KJ法を参考にして分類した。その結果、高群では、自由記述の内容量が多いことが分かった。また、低群では、4つの情報源のうち、行為的情報と言語的説得の情報に該当する経験が極端に少ないことが分かった。

考　察

2回の検証結果から、仮説1は支持され、仮説2、3は支持されないことが分かった。このことから、「進路決定自己効力」は「無気力感」と負の相関をなし、進路決定に関わる経験をした時期に関係は無く、内容によって差が出ることが分かった。

内容では、低群で行為的情報と言語的説得の情報に該当する経験が少ないことが分かった。よって、そのような経験を多くするためにも、習い事、部活動、ボランティア活動といった課外活動への参加は積極的に行うことが良いといえる。

引用文献

富永美佐子　2008　進路選択自己効力に関する研究の現状と課題　キャリア教育研究, 25, 97-111.

注）2013年度卒業論文　指導教授：松嵜くみ子先生

思春期と拒食症との関係性についての考察

文屋香純
(跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科)

問題

近頃、テレビや雑誌でしばしば拒食症が取り上げられるようになった。現代の日本では、痩せている方が好ましいとされている。そのような風潮が手伝い、過度のダイエットから拒食症を含む摂食障害の患者が増えているのだという。また、拒食症発症年齢の若年化が進んでいる(鈴木, 2005)。

目的

実際にはどの程度患者がいるのか、具体的な症状や治療はどんなものか、といったことが気になり、３年次に調査を行ってまとめたところ、思春期での発症事例が多く見られた。しかし、なぜ思春期にダイエットをする者が急増するのか、思春期という成長過程がどの程度、摂食障害に関係しているのかという根本的な部分にまで及ぶことができなかった。そのため、今回はそれを踏まえて、思春期と拒食症には関係性があると仮定し、

・なぜ思春期の女性に多く発症するのか
・なぜ発症年齢が低年齢化してきているのか

の２点について、分析し、考察することにした。

方法

拒食症に関する発達心理学や医学分野の論文を中心に文献研究を行った。

結果

拒食症の発症と思春期は一切関係がないとする研究は見られず、いずれも思春期との関連が見られた（例；向井, 1994)。また、同一内容の質問紙法を男子と女子、両方に行い、結果を比較する研究が行われていたが、女子は二次性徴を体験したことによって、体重減少行動が増加することが認められた。しかし、男子の体重減少行動と二次性徴の有無には相関がみられなかった(上長, 2007)。

考察

1、なぜ拒食症は思春期女性に多く発症するのか

先行研究の分析から、拒食症発症者が男性に比べ、女性に多く見られるのは、二次性徴による皮下脂肪の増加が１番の要因だと考えられる。そのため、二次性徴があらわれる思春期での発症が多いのではないだろうか。鈴木（2005）が述べているように、現代日本は痩せていることが美徳とされており、肥満体型の人間は自己管理ができていないなどという負の評価を受けやすい。こうした風潮の中で、思春期の女性は二次性徴を迎える。すると、健康的な身体発育による体重増加や皮下脂肪の増加を悲観的にとらえてしまい、「成長した」ではなく「太った」と認識してしまうのではないだろうか。

2、なぜ発症年齢が低年齢化してきているのか

発症年齢の低年齢化に大きく影響を与えているのは、やはり「発達加速」(田口, 2010) であろう。それに加え、メディア効果の１つである「ファラー効果」も影響を与えているのではないだろうか。メディアで理想像に近い人物をたくさん見ることで、自分の姿を見た際にファラー効果を受けて、必要以上に自分の体型に対して悲観的な認識を持つといったような影響があると推測される。近年では、急速にインターネットが普及し、年齢に関係なくだれでも情報が手に入るため、こういったことも低年齢化の要因となっているのではないかと考えられる。

引用文献

上長然　(2007)
思春期の身体発育と摂食障害傾向
発達心理学研究第１８巻第３号
日本発達心理学会

向井隆代　(1994)　思春期女子における身体的発達段階と摂食障害傾向の関係
日本教育心理学会第３６回総会発表論文集
日本教育心理学会第３６回総会準備委員会

鍋田恭孝　(2011)　身体醜形障害-なぜ美醜にとらわれてしまうのか-　講談社

鈴木眞理　(2005)　ダイエット障害-ストレスとやせ願望の奥にひそむ、摂食障害という心の病-　少年写真新聞社

田口久美子　(2010)　思春期女子の発達加速
長崎外大論叢第１４号　長崎外国語大学

注) 2013年度卒業論文 指導教授：山口豊一先生

スター時代とアイドル時代のインタビュー比較

—ファンと編集者は変化しているのか—

渡邉彩乃
（跡見学園女子大学　文学部　臨床心理学科）

問　題

芸能人といえばかつてはスターがもてはやされていたが、最近ではスターではなく、アイドルがもてはやされるような印象を筆者は持っている。この事について文献を調べたところ、金子（1991）によるとアイドルは、日本におけるラジオと映画の時代からレコードとテレビへのメディア交代のなかで誕生した芸能人の一類型であり、「スター」と「アイドル」とを比較すると、両者はどちらも十分な量のファンを抱えた人気者である。イメージ財として産業的実体をもっていたことにおいては同じであるが、他方両者には商品としての質的な差違があると主張している。

目　的

人気芸能人がスターからアイドルに変化することに伴い、芸能雑誌はその変化についていけているのかを調べる。その現象を調べるために、今回は芸能雑誌のインタビュー記事に着目することとする。

方　法

現代の雑誌から昔の雑誌まで電子書籍化して保存してある国立国会図書館にて行う。

筆者は数ある雑誌の中から1952年10月から発行が続いている『明星』（集英社）を調査対象とした。あらかじめ調査用紙を作成して行き、雑誌に記載されていた質問内容を記入する。各々の世代を30冊ずつ調査していき、仕事、生活、恋愛、その他の分類にてどの項目が一番多いのか調査していく。

結　果

Figure 1は女性スター時代、アイドル時代の編集者での質問内容を比較したグラフである。

スター時代である1950年代、1960年代共に仕事についての質問が一番多い。アイドル時代である1990年代、2000年代を比較してみると、1990年代は生活についての質問が一番多く、2000年代は仕事についての質問が多く行われている。

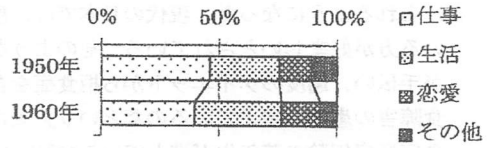


Figure 1　女性スター、アイドル時代の編集者間の質問内容比較（%）

Figure 2女性アイドルに対する編集者ファンからの質問内容比較したグラフである。

仕事に対しての質問はファンが多く行っている傾向がみられ、生活にたいする質問が減っている。全体的にファンのほうが編集者よりも質問内容に偏りがなく、均等にどの分類の質問も行っている傾向がみうけられる。

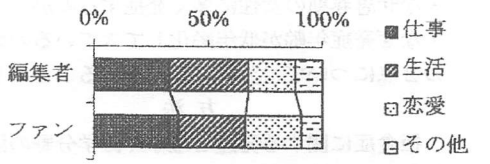


Figure 2女性アイドルに対する編集者ファンからの質問内容比較（%）

考　察

スター時代で仕事に対する質問の割合が多い原因は、手の届かない庶民の憧れ的存在の「偶像として崇められていたアイドル」であったからではないか。しかし時代の流れによりアイドルは握手会などを行うようになり「会いに行けるアイドル」に変化した。これによりアイドルと直接会話ができ、自分で直接質問できるようになった。これが原因で仕事、生活に対する質問が多くなっている結果ではないか。

引　用　文　献

金子修介（1991）．失われた歌謡曲　小学館

注）2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

おしぼりの使用後処理行動

—原因帰属への試み—

影　山　明　日　香
（跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科）

問　題

飲食店でタオル地のおしぼりを出された場合、私達はそれを使用した後、どのようにしているだろうか。筆者はおしぼりの使用後の置き方が個人の特性によるものなのか、あるいは他の要因によって決まるものなのかを調べることにした。

目　的

飲食店における客の行動を観察することによって、使用後のおしぼりをたたんで置く人、たたまないで置く人の違いが年代、性別、来店人数、飲食時間帯によって変動するかどうかを調べる。

方　法

来店客の行動の観察調査を行う。この調査は、アルバイト先である飲食店（居酒屋）の勤務中に行った。対象は、2013年4～5月までに来店した客で、記録用紙に日時、性別、年代、使用後のおしぼりの置き方、在店時間などを記入する。

結　果

合計観察日数は8日間で、合計観察時間は38.5時間であった。

おしぼりの使用後の置き方はFIGURE 1の通りで、これを見ると、来店したほとんどの人が使用後のおしぼりをたたんでいたということがわかる。

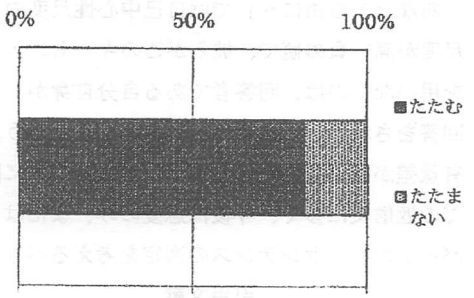


FIGURE 1　全体のおしぼりの使用後の置き方（%）

最も混雑している時間帯と、最も空いている時間帯のおしぼりの使用後の置き方を見たものがFIGURE 2である。わずかではあるが、店内が混んでいると、使用後のおしぼりをたたむ人が少ないということがわかった。

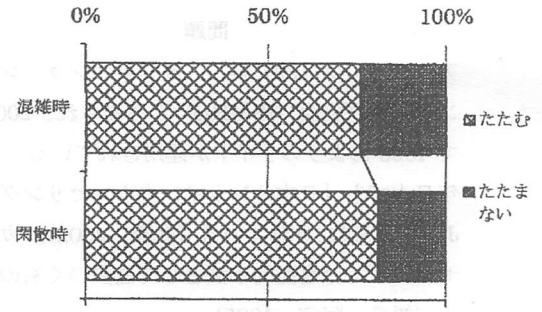


FIGURE 2 混雑時と閑散時のおしぼりの使用後の置き方（%）

考　察

混雑時に比べて閑散時の方が、使用後のおしぼりをたたんで置いてあったということについては、いくつかの要因が考えられる。

一つ目は他者の視線を気にして行動が変わったという考え方である。吉田（1996）は自分の特性をどのように帰属させたいか、あるいはどういった印象を与えたいか、という動機に基づいて遂行行動を統制していると言っているが、この場合も他者の存在による影響を受けたのではないかと考えられる。

二つ目は混雑時には様々な意味でサービスが低下することは明らかだから、几帳面な人は混雑時を避けて入店する傾向があるのかもしれない。

使用後のおしぼりをたたむ率がどのような要因によって変動するのかについては、以上に述べたように様々な可能性があるので、今後の課題としては、一つ一つの要因を丹念に調査していく必要があるだろう。

引用文献

吉田俊和（1996）. 社会的促進過程に関する研究 - 他者の存在と個人のパフォーマンス - 名古屋大学大学院教育学研究科博士論文（未公刊）.

注）2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

カウンセラーの特性がメールカウンセリングに及ぼす影響の基礎的研究

小久保綾乃
跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科

問題

アメリカでは 1997 年、アメリカオンラインカウンセリング協会（ISMHO）が設立され、2000 年で 4000 あまりのサイトが運用されている。1997 年日本でも、「日本オンラインカウンセリング協会 JOCA」が設立されている（武藤、2002）。カウンセリングでは書記的手法として位置づくものである（福島・阿部　1995）。

目的

本研究では、カウンセラーの特性がメールカウンセリングに及ぼす影響について検討する。

方法

調査時期：2013 年 6 月中旬～7 月中旬、**調査対象**：私立 X 大学の学生及び院生 49 人、**調査手続き**：調査紙及び相談内容が記憶された USB メモリのセットを配布。それに記憶されている相談内容（後述）に相談回答を入力、**調査内容**：フェイスシート、自己中心性尺度(Enright,1980 山本訳,2008)、多次元共感性尺度(Davis,1983 桜井訳,1988)、PANAS (Watson etc.,1989)、相談刺激文(恋愛とアルバイト)

結果

49 の返信文から 28 個のキーセンテンスを抽出し、上記の下位尺度 8 個を独立変数とした判別分析を行った（Fig1,Fig2）。

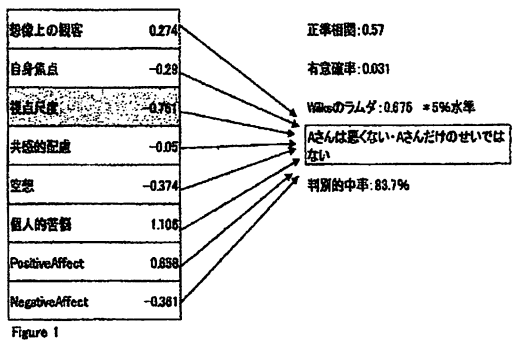


Figure 1

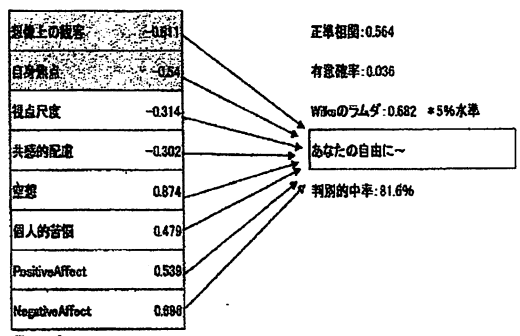


Figure 2

考察

結果から、「Aさんは悪くない～」というキーセンテンスは少なくとも、相手を尊重し、寄り添う姿勢を第一に見せようとした結果であると思われる。不安や動揺を覚えつつも緊張感を持ち、できるだけ肯定的な効果を与えようという前向きな気持ちの持ちようが窺える。ただ、視点尺度が高いと、断定的な肯定はしにくくなるのだろう。

「あなたの自由に～」では自己中心性尺度の下位尺度が高い負の値で、彼らがこのキーセンテンスを用いないのは、回答者である自分自身が、この回答をされることを望んでいないからと思う。

有意差が得られたキーセンテンスは、恋愛に関しての返信文に多く、今後は恋愛のみ、またはアルバイトのキーセンテンスの選定を考えるべきだ。

引用文献

桜井　茂男（1988）．大学生における共感と援助行動の関係―多次元共感測定尺度を用いて―　奈良教育大学紀要　第 37 巻　第一号（人文・社会）　149-153

2013 年度卒業論文　指導教授：宮崎圭子先生

青年期後期女子における発達障害児子育て不安

鹿子田 睦月
跡見学園女子大学 文学部 臨床心理学科

問題

障害や病気をもつ子どもの出生は特異なことではないのだが、胎児に異常があるといわれたほとんどの母親が衝撃を受ける(村上,2003)。

先行研究から、発達障害を抱える子どもの母親の不安は周囲との関わりで変化し、出産する前の母親は障害受容に関わる不安が見受けられるということが示唆される。だが子育て時の不安と妊娠時の不安は研究されていても、それ以前の青年期後期に発達障害児を育てることに対しての不安はほとんど研究されていない。

目的

本研究の目的は、青年期後期の発達障害児子育て不安を明確にすることである。そこから、早い段階での不安を明確にすることにより、その後の障害受容の手助けとなることが考えた。また、発達障害児を育てる母親への理解やこれからのよりよい支援につながるのではないかとも考えた。

方法

2013年6月中旬から8月上旬にΛ県内のB大学の女子大学生15名（平均年齢＝20.06）を対象に調査を行った。調査項目として、発達障害児子育て不安に関するフェイスシートと半構造化面接を用いた。分析方法は、KJ 法を参考にした分析を行った。

結果

フェイスシート、半構造化面接の結果からすべての調査協力者に不安があることがわかった。さらに子どもや育児への好感感情が高く、発達障害について知識のある調査協力者であっても不安を抱いていた。不安の内容は、障害受容の不安や周囲の人間関係の不安、教育の不安、子どもとのコミュニケーションの不安、など多様に分析でき、周囲の人間関係に対する不安の意見と母親である自分自身への不安が最も多かった。80%の調査協力者は調査を終えて、発達障害児を育てることは自分に関係のない事ではないと語っていた。

考察

結果から子育てへの憧れが強いほど、発達障害児への子育て不安が強くなると考えられ、それは定型発達の子どもや子育てと発達障害児の子どもや子育てのイメージの差が大きいからであると考えられた。母親である自分自身への不安と周囲に対する不安が最も多くあったことから、母親自身の不安は定型発達の子どものよりも子育てが難しくなることと、母親という役割の重さから生じるものだと考えられる。周囲に対する不安は、定型発達の子どもをもつ親でも不安を感じ、かつ発達障害児となると差別や偏見といった問題が生じるのではないかと考えられた。また支援現場での支援者の態度も不安に関係があると考えられた。そして、発達障害児の子育て不安についての半構造化面接を行うことによって、調査協力者は発達障害児を育てることに対する問題意識が芽生えたと考えられた。

引用文献

村上真理・中込さと子・横尾京子　2003　発達障害がある子どもと家族のケア;助産師の立場から　小児看護,26(12), 1654-1658

注）2013年度卒業論文　指導教授：片野智治先生

鉄道人身事故の発生傾向

—自殺予防を考える—

小 野 こ ず え

(跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科)

問　題

日本では年間約3万人もの人が自ら命を絶っている。そこで、自殺予防に役立つような研究の必要性があると考えた。鉄道を利用しての自殺を対象としたのは、他に及ぼす影響が大きいと考えたからである。鉄道における自殺の発生に関し、どのような傾向があるのかを把握することは自殺の原因を推測する参考になり、自殺予防に役立つと考えた。

目　的

『鉄道人身事故データブック 2002-2009』(佐藤,2011)で分析されている駅構内で発生した人身事故のみならず、駅間で発生した人身事故も含めて分析を行う。駅構内と駅間で発生した人身事故について分析を行った場合、「自殺」を原因とする人身事故は全体でどれくらい発生しているのか、また1日平均、年平均についてや、月別、日別、時間帯別、曜日別の人身事故の発生ついても分析し、どのような傾向がみられるのかを調べる。

方　法

国土交通省の情報公開制度を利用し、『運転事故等整理表』という資料を入手する。そこから、平成14年度から平成21年度までの8年間に発生した自殺、立入、転落、接触の4つを原因とする人身事故について、月別、日別、時間帯別、曜日別に分析する。

結　果

8年間で発生した人身事故のうち約63%が自殺を原因とするものであった。1日に1.6人、1年に596.8人が鉄道を利用し、自殺を図っていることがわかった。平成14年度から平成21年度の8年間に発生した人身事故の件数と割合、1日平均、年平均を表にしたものがTABLE 1である。FIGURE 1はTABLE 1から比率をとってまとめたものである。

原因が自殺となっているものに関し、月別で最も多いのは10月で439件(9.2%)であった。次いで1月が420件(8.8%)と多かった。日別で最も多かったのは20日で177件(3.7%)、次いで26日の173件(3.6%)であった。時間帯別では、1日の始まりから終わりにかけてだんだんと増加していることがわかった。曜日別でみると、水曜日の736件(15.4%)が最も多く、次いで月曜日の705件(14.8%)が多かった。

TABLE 1　人身事故発生件数

原因	発生件数	%	1日平均	年平均
自殺	4774	62.7	1.6	596.8
立入	1591	20.9	0.5	198.9
転落	396	5.2	0.1	49.5
接触	857	11.2	0.3	107.1
計	7618	100	2.5	952.3

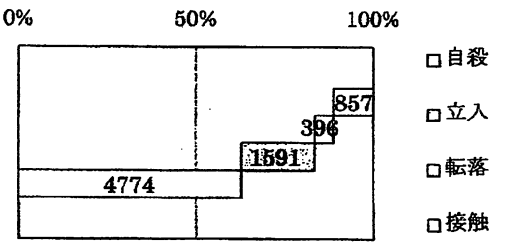


FIGURE 1　人身事故発生割合(帯グラフ内の表記数字は発生件数)

考　察

今回の分析だけでは、鉄道を利用しての自殺に関し、ある方面からしかみることができていない。自殺の原因や動機に関しては、決してはっきりとわかるものではないかもしれないが、個人がライフステージのどこに位置づけられるかで、自殺へ至る経緯が異なることなどが考えられる。都道府県別や、性別、年齢別の発生傾向など、異なった視点からも分析してみる必要性があるだろう。

引用文献

佐藤裕一 (2011). 鉄道人身事故データブック 2002-2009　つげ書房新社

注) 2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

犬への装飾行為と愛情の関係

－新しい犬人関係心理学の提案－

小笠原弘美

（跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科）

問題

人間と犬の関係も掘り下げて研究する価値があると筆者自身が思うことから、本来心理学の研究の対象から外れた犬を取り上げた。なぜなら、犬だけは他のペットとは異なる存在で人間に対して積極的に友好関係を形成する特異な動物だからである。このことはMasson(2010)でも指摘されている。そこで、犬人関係を追求する手がかりとして、装飾は愛情の現れか人間の利己主義か、どちらなのかということを調べた。

人間から犬への働きかけの一つは飼い主の「しつけ」であり、人間の犬に対する犬を人間社会に適応させるための愛情行為である。装飾は、しつけ同様に飼い主が犬に対して行うものであることから、装飾犬と一般犬(非装飾犬)の平均しつけ率を比較することによって、犬への装飾行為が果たして犬に対する愛情の現れであるのかを判定することができると考えられるのである。

方法

観察対象の犬は散歩犬とし、それぞれしつけの有無と装飾の有無について記録をする。データ数として100匹ずつ調査し、100匹に到達をしたらデータをとるのを終了する。駒沢オリンピック公園総合運動場が2013年5月18日、代々木公園が5月9日・10日・12日・19日で時間帯については午後4時半から6時半に行った。

観察内容は、①装飾の有無②しつけの有無とする。記録内容の①装飾の有無については、(a)衣服の有無、(b)リードが華美、(c)アクセサリーをしている、(d)ベビーカーに乗せている、(e)毛を染めている、(f)マニキュアの6点を条件とする。②しつけの有無については、(a)リードを引っ張る、(b)吠える・唸る(c)飛びつき(d)飼い主の足にまとわりつく(e)マーキングが多い(f)リードを放すと戻ってこない、の6点を条件とする。この中で①の(a)について犬の雨具は機能性を追及しているため、そこには装飾の目的がない。従って装飾があるというデータ数には含めずに装飾なしと判断する。①の(d)については身体に不自由がある場合は装飾の目的がないため装飾なしと判断し、そうでない場合は装飾ありと判断する。②の(e)については客観的な判断が必要であるため一度見ただけでは決して判断せずに3回以上であればしつけなしと判断する。

結果

もし、装飾が犬に対する人間の愛情行為であるならば、装飾犬のしつけ率は非装飾犬に比べて増加しているはずである。しかしながら、非装飾犬のしつけ率が85%であったのに対し、装飾犬のしつけ率は79%であり、有意にしつけ率が増加するような傾向は、見られなかった。(FIGURE 1)

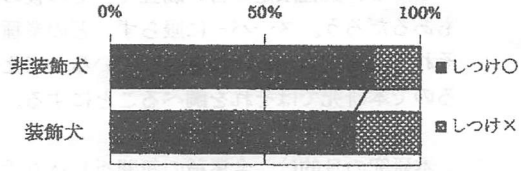


FIGURE　1　装飾の有無におけるしつけの比率

考察

以上の結果から装飾行為は、愛情とみなせないことがわかった。犬の観察を通して気づいたことがある。それは、尾をふって喜んでいると見なせる犬の行動を問題行動として矯正しようとする訓練士がおり、この矯正までも「しつけ」と見なす訓練観には、筆者は賛成できない。本研究では、しつけの有無を判定しているが、それはあくまで筆者の基準によるものである。犬を単に人間に隷属すべき存在として扱うのではなく、人間と犬が好ましい関係を築いて行ける社会を目指し、心理学においても、そのような観点からの犬人関係の研究が、今後は蓄積されていく必要があると筆者は考えている。本研究は、今後進めるべき研究の1例である。

引用文献

藤井聡 (2011). 犬にバカにされない飼い主になれる　日東書院

Masson,J.M. (2010). *The dog who couldn't stop loving.* NewYork:HarperCollins Publishers

---

注) 2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

新聞折り込みチラシの配布傾向分析

—曜日に注目したマーケティング心理学的考察—

遠藤　史織
(　跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科)

問　題

私たちが広告を目にしない日はない。近年はインターネットと一家庭に一台は必須となってきているパソコンの影響により、インターネット広告というものもよく目にするようになった。それぞれの広告はできるだけ特定の相手を絞り込んで広告効果を出しているのである。新聞の折り込み広告は曜日によるマーケティング戦略が使われていると推測される。

留田・池添(1989)によれば、スーパーの食品に関するチラシは土曜日に多く、白地に赤で「セール」という語入りが目立つという。

しかし、業種限定の古い調査で、その後の変化もあるだろう。スーパーに限らず、どの業種でもそれぞれ独特の曜日戦略を用いていると考えられるので本研究ではそれを調べることにする。

目　的

本研究の目的は、全業種の新聞折り込みチラシを対象にし、曜日ごとに集計することによって新聞折り込み広告片の曜日特性について調べることである。

方　法

埼玉県さいたま市南区の2013年3月から5月末までの休刊日4月15(月)、5月7日(火)を除いた朝日新聞朝刊90日分を使用した。

また分類分けの結果、全1969枚に折り込まれたチラシを業種別、曜日別に選別し集計した。

チラシの折込については、どの曜日にも分散するものと、特定の曜日に集中して織り込まれるものがあるので、まずは全体を大きく二つに分類する。基準は1つの曜日で全体の4割以上になれば曜日集中型、それ以外を曜日分散型とする。

結　果

Table 1 は曜日分散型と曜日集中型の結果である。まず曜日分散型であるが、33項目中20項目がこれに当てはまった。特に教育分類広告片が多く集まっており、教育 - 音楽系分類以外はすべて曜日分散型であった。

次に曜日集中型であるが、物品分類の家電・楽器や書籍・文具、飲食の小分類である飲食店、軽食、宅配が当てはまった。

また飲食の小分類が曜日集中型で大分類で見た飲食が曜日集中型であったが、これは飲食小分類がそれぞれ別の曜日に集中しているからである。

Table 1　チラシの曜日特性

曜日分散型		曜日集中型		
分類番号	分類名	分類番号	曜日	分類名
1	物品	1e	月	物品－書籍・文具
1a	物品－服飾	2f	水	飲食－飲食店
1c	物品－化粧品・雑貨	13j		教育－音楽系
2	飲食	16n		娯楽－文化系
3	住居・通信	16p	金	娯楽－スポーツ系
7	公的教育施設	1b	土	物品－食品
8	店舗・商業施設	1d		物品－家電・楽器
9	金融・保険	2h		飲食－宅配
10	医療・福祉	4		不動産
12	古物・レンタル	5		法律・冠婚葬祭
13	教育	6		移動
13i	教育－英語系	11	日	日常サービス
13k	教育－カルチャー系	2g		飲食－軽食
13l	教育－学業系			
13m	教育－スポーツ系			
14	政治			
15	美容・健康			
16	娯楽			
16o	娯楽-舞台系			
16q	娯楽－ゲーム系			

考　察

曜日集中型の家電や食品、不動産等が土曜日に集まっているが、これらは家庭内で使用する人数が複数であり、食品以外は高価なものを取り扱っているチラシである。逆に曜日分散型は服飾や化粧品、美容や健康等、高価であっても家庭内で使用する人数が限られるものが多く含まれていることがわかった。

このことから、曜日分散型は個人で使用する目的のものが多く含まれ、曜日集中型は家庭で複数人に関係してくる傾向のあるチラシが多く折り込まれていることがわかった。

引用文献

留田明美・池添博彦(1989).　食品広告片に関する研究　帯広大谷短期大学紀要，26，9－20

注) 2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

メガネ店内における探索購入行動から見た買い物客の求めるサービス

—販売側と購入側の認知差の視点から—

鶴田祐輝
(跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科)

問題

近年、「好きだけど買わない」買い物客が増えてきた。この為、買い物客が求めるサービスと販売員が考えるサービスに違いが生じているのではないだろうか。この違いは、一体何が原因であるのだろうか。衝動買いが起きる事の少ないメガネ店にて、買い物客が求めるサービスと販売員の考えるサービスの違い、また、客の性別などの要因が、店内での行動に違いを生むのか、店に対する満足度に変化が生じるのかを確認した。

目的

買い物客と販売員の認知のずれを確認する為に5つの調査を行った。

[調査1]買い物客の移動には、2つのパターンがあると考えられる。1つ目は、店内全体を見て回る悉皆型、2つ目に入店して1,2か所だけ見る熟考型である。行動パターンと客の要因が関係しているかを観察する。

[調査2・4]買い物客の満足度から、客が店に対して、何を重視しているのか調査する。また、販売員も同様の評価をして、販売員は何を重視しているか、確認する。

[調査3・5]4店の方針の違いと訪れる買い物客の要因に関係があるかを確認していく。

方法

[調査1・3・5]和真メガネ、パリミキ、JINS、ZOFFの4店において、買い物客の性別や年齢、人数を観察した。和真メガネは、店内での移動の様子も同様に記録した。

[調査2・4]店に対する満足度を調べる為、買い物客5名に質問紙調査を行った。和真メガネは販売員との違いも確認する為、同様の質問紙調査を行った。

結果

[調査1]購入した買い物客で、焦点型4組、悉皆型5組であった。購入しなかった買い物客で、焦点型22組、悉皆型16組であった。

平均在店時間は、購入の有無に関わらず、悉皆型の在店時間が長い事が分かった。

購入した買い物客・悉皆型を除いて、他の行動パターンは一人客が多い事が分かる。

[調査2・4]合計得点が一番高いものは質問17雰囲気からよいイメージがする(81点)であった。

[調査3・5]店に来店した買い物客の性別は、どの店も同じくらいの比率であった、和真メガネ、パリミキでは、50代、60代以上が多く、JINS、ZOFFでは、比較的若い年代が多かった。

接客は、和真メガネとパリミキは同じ内容で、ブランドやフレームの説明が多く、JINS、ZOFFは、デザインの説明がほとんどであった。

考察

各店に訪れる買い物客の大きな違いに年齢がある。他社の製品も取り扱う店は、高齢の買い物客が多い事に対し、自社製品のみを取り扱う店は若い買い物客が多い。

和真メガネやパリミキは高価な商品も取り扱っている為、お金が自由に使える中高年が多く訪れる結果となったと考えられる。

また、セカンドアプローチの違いからも、訪れる買い物客の違いが確認出来た。

和真メガネやパリミキに訪れる買い物客は、商品以外にも安心や保証を求めている事が多いと考えられる。高価な商品を購入する買い物客は、掛け心地は良いか等を吟味する為、販売員に説明を求める。JINSやZOFFは、値段が安価な為、もし合わなければ、もう一度購入しようと考える買い物客が多い。この為、販売員もフレームのデザインを重視して、説明すると考えられる。

JINSの評価では自分だけのものがあると思える事が高い評価となった。JINSで取り扱っているフレームのデザインは似ているものが多い為、自分たちのみでフレームを選びやすい環境にある事が原因だと考えられる。

[引用文献]
博報堂買物研究所(2007). 買物欲マーケティング - 「売る」を「買う」から考える　ダイヤモンド社

注)2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

ジーンズ購入行動に見られる性差、年齢差、同伴者の有無

～選択行動の色彩心理学的考察～

野口　希美

（跡見学園女子大学　文学部　臨床心理学科）

問　題

ジーンズの色は着用している人の好みが反映されていると考えられているが、実際の購入場面では店員による色の提案や同伴者の意見が通ったりすることがあるので、着用状態だけを見て全ての人が本人の色の好みを反映しているとは限らないのである。

ジーンズの購入に関する先行研究では、荻野他(1978)のように質問紙により生活と衣服の関連について研究したものは存在するが、購入行動を観察するといった研究は筆者が探した限りでは見つかっていない。そのため本研究では、店員として潜入し観察することによって購入行動を分析することにする。

目　的

ジーンズを試着し購入を決定した人を観察して、性別や年齢層、同伴者の有無といった購入行動を観察することで、色の好みの傾向を調べる。

方　法

ジーンズ購入者の購入行動の観察調査を行った。記録にあたって対象者は全年齢とし、記入の際には10代まで、20～30代、40～50代、60代以上の4区分とする。性別は男性と女性の2つに分類する。色はジーンズの中でも代表的な青色、無彩色のみとし、紺に近い青、濃い青、少し濃い青、少し濃い青ダメージ加工あり、薄い青、薄い青ダメージ加工あり、茶色い青、茶色い青ダメージ加工あり、白っぽい青と、無彩色の計10種類に分類する。ジーンズ生地で作られていてもカーゴパンツ、ショートパンツなど販売上の分類がジーンズと異なるものは除外する。試着した本人の同伴者が色の最終決定をした場合には同伴者の性別、年齢層も一緒に記録する。

結　果

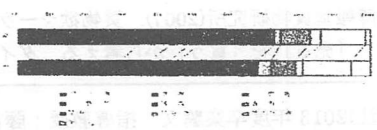


Figure 1 性別によるジーンズの色の好み（%）

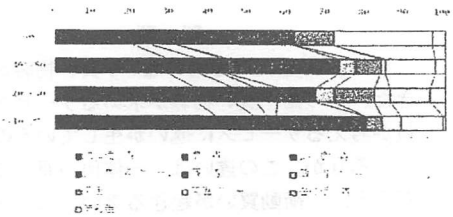


Figure 2 年齢層によるジーンズの色の好み(%)

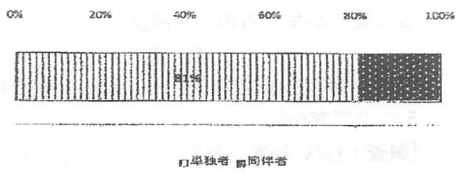


Figure3　単独購入者と同伴者のみによる選択購入者の割合（%）

男性の方が女性より濃い色のジーンズを好み、全体では若い人ほど濃い色を、年配の人ほど白っぽい色を好むという特徴が見られた。

考　察

若い人ほど濃い色、年齢が上がるほど薄い色を好むという傾向があったが、これには試着し色を決定した人にその色を選んだ理由を聞いていくといったような調査を行うことで年齢層によって色に対する意識の違いが分かるのではないだろうか。また、試着した人の同伴者が購入する色を決定した場合の割合は多く、問題で述べたように着用状態がそのまま本人の好みを反映しているとは限らないと言えるだろう。

引用文献

荻野千鶴子・酒井清子・早坂美代子・村瀬道代・沢辺 恭子(1978).　現代における生活と衣服との関連について　(第2報) 女子大生とジーンズ　名古屋女子大学紀要　名古屋女子大学 24, 19-24.

2013年度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

カフェ利用客は何をしているのか

—カフェ選択における心理的モデルの提案—

佐 藤 加 苗

跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科

問 題

筆者は仕事の前などのちょっとした空き時間によくカフェを利用する。カフェがどのような場として利用されているのかは片岡（2005）の調査によると、くつろぎ・休憩の場が67%、会話の場が18%、飲食をする場が9%、勉強・仕事・趣味の場が2%、待ち合わせの場が3%、その他が1%とされているが、この調査はアンケートによるものなので、実際にはどれぐらいの時間利用し、どのような行動をしているのか正確にはわかっていない。そこで筆者が店舗に行き、実態を調査することにした。

カフェにも色々あるが、中村(2009)によると、

ワンウェイカフェ（本論文ではセルフサービスカフェ）…セルフサービスのカフェ全般

フルサービスカフェ(本論文では従来型カフェ)…若い人々が集うおしゃれなカフェであり、かつフルサービスである

和カフェ…和のイメージを強く押し出したおしゃれなカフェで、フルサービスが基本

ダイニングカフェ…ランチやディナータイムにしっかりとした食事を提供することができて、フルサービスが基本

という分類を主張している。

本研究では分類ごとに行動内容の項目に違いが出るのかどうかを見ていきたい。

目 的

カフェの分類（セルフサービスカフェ、従来型カフェ、和カフェ、ダイニングカフェ）ごとに店内の客の行動を観察し、どのような目的でカフェが利用されているのかを調べる。また、カフェの分類ごとに客の行動内容や利用時間に差が見られるかどうかにも注目する。

方 法

カフェの分類ごとに、セルフサービスカフェ5件、従来型カフェ5件、和カフェ5件、ダイニングカフェ5件の計20件を回り、5時間ずつ店内を観察し、客の行動を記録する。

結 果

Figure 1はカフェ分類別の1人作業の内容である。調査した人数は716名（男311名、女405名）であった。その行動の比率はFigure 1に示してある。

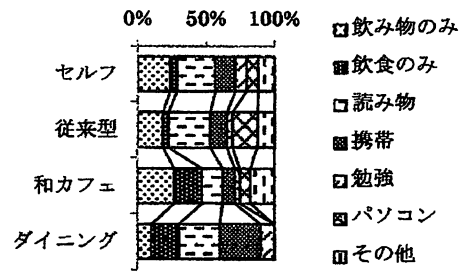


Figure 1　カフェ分類別の1人作業の内容(%)

考 察

Table 1はカフェ選択モデルで、調査から得られた結果をもとにして利用客の選択基準を表にまとめたものである。

セルフサービスカフェは1人作業が多く、男性に選ばれやすい傾向があった。

従来型カフェは男性が多く、読書を目的とした利用客に選ばれやすい傾向があった。

和カフェは女性の利用が多く、飲食にこだわりがある利用客に選ばれやすい傾向があった。

ダイニングカフェは食事がメインで、複数客で会話を目的として利用されやすく、長時間過ごしたい利用客に選ばれやすい傾向があった。

Table 1　カフェ選択モデル

カフェの分類	選択基準
セルフ	(1人作業、男性)
従来型	(男性、読書)
和カフェ	(女性、飲食)
ダイニング	(食事、複数、会話、長時間)

引用文献

片岡巌(2005).はじめての「カフェ」オープンBOOK　技術評論社

中村新(2009).となりのカフェが儲かっている本当の理由　ぱる出版

注)2013年度卒業論文 指導教授：藤澤伸介先生

駅前シャッターにおける落書きの色と場所の考察

—「落書き」の心理学的研究（2）—

門倉未来
（跡見学園女子大学　文学部臨床心理学科）

問題

本研究では、物体の存在する目的に合致しない図や文字などの書き込みを「落書き」、店がシャッターに表示した店名や営業時間など、目的に合致した書き込みを「シャッターロゴ」と定義し、駅周辺の商店シャッターに対する落書きとシャッターロゴについて調査する。

目的

駅周辺の商店のシャッターに記入された落書きに共通する特徴を分析し、落書きする際にどのような場所を選ぶのか、またどのような色を選んで落書きするのかを明らかにする。

方法

観察調査を用い、駅周辺の商店のシャッターの中で、落書きをされているシャッターとされていないシャッターの違いを調べる。

結果

今回調査したすべての地域で、ロゴが書き込まれているシャッターには落書きはされていないことがわかった。また、落書きとシャッターロゴではシャッターロゴのあるシャッターが多く、落書きのあるシャッターは少なかった。

1日の平均乗車人数が10万人以下の駅が多く、全体を見ると乗車人数が多い都心に近い駅ほど落書きされたシャッターの枚数も多いという傾向が見られた。

シャッターロゴは灰、白のシャッターに多く、シャッターロゴの色は黒、赤、青、緑、黄が多かった。落書きは灰のシャッターに多く、落書きの色は黒、白、赤、青、シルバーが多かった。

シャッターも落書きも駅から見て左側に多いという結果を得られた。(FIGURE 1)

考察

シャッターロゴでは灰地に赤の図や白地に青といった彩度の低いシャッターに彩度の高いロゴ、白地に黒といった明度の低いシャッターに明度の高いロゴを表示したものが多かった。地の色に対して、図を明度や彩度の差の大きい色にすることにより、図の色が遠くから見てもはっきりと認識できるようになるため、シャッターロゴは見やすさを重視して記入されていると考えられる。

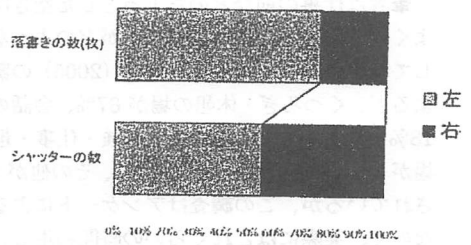


FIGURE 1 落書きとシャッターの場所(%)

落書きでは、灰地に黒、灰地に白、白地に黒といったように、無彩色の地に無彩色の落書きが半数以上を占めていた。落書きは悪ふざけや破壊を目的として行う場合が多いと筆者は考えている。そのため、落書きするときは地の色に関係なく、手に入りやすい色を使って落書きをしているのではないかと考えられる。

シャッターも落書きも駅から見て左側に多かったことから、落書きはシャッターの多い場所を選ぶと考えられる。人の集まりやすい都心に落書きが多く、シャッターロゴによって所有の明確性が確保されたシャッターには落書きはされていなかった。

引用文献

Berlin, B., &Kay, P. (1969). Basic Color Terms: Their Universality and Evolution. University of California Press

小林茂雄 (2002). 都市の街路に描かれる落書きの分布と特徴—渋谷駅周辺の建物シャッターに対する落書き被害から— 日本建築学会計画系論文集, 560, 59-64

小松英雄 (2001), 日本語の歴史—青信号はなぜアオなのか, 笠間書院

注）2013度卒業論文　指導教授：藤澤伸介先生

2013年度　卒業論文　指導方針

（ポスター発表順）

指導教授	指　導　方　針
藤　澤　伸　介	卒論は、学生にとって初めての研究体験であることを考慮し、日常人間活動のどのような現象も心理学研究のテーマになり得ることが実感できるよう、テーマ選択は本人の興味関心を最大限尊重し、先行研究との関連でオリジナリティが発揮されるように指導した。必ず、量的測定を含み統計的処理を施すことを義務づけたが、就職活動やアルバイトと両立可能な調査も、積極的に認めた。研究の楽しさが体験できることを第一目標とした。
山　口　豊　一	本ゼミでは、現在教育界の重要な問題である不登校やいじめ、校内暴力、発達障害児童生徒への対応の在りかたに関するテーマを中心に取り組んでいます。まず自分が取り組みたいテーマの論文を展望して、発表します。そこで、テーマの修正などがあります。その後卒論のテーマに沿って研究が進められ、中間発表ではゼミの仲間から意見を貰います。卒論を書き上げた後、一人ひとりが発表し、お互いの研究内容をシェアリングします。
松嵜くみ子	子どもの心身の健康をテーマに、そのアセスメント、慢性疾患、不定愁訴、心身症、不安、抑うつ、発達の問題、行動の問題等の理解、本人、家族、学校、医療、福祉が協働して問題解決するための工夫等について演習を進め、各自の問題意識を大切にしながら、卒業論文に取り組みました。視点、手法等においても、その人らしさの発揮できる指導を心がけました。
宮　崎　圭　子	私のゼミでの卒論指導方針の最終目的を、皆さんの論理的思考能力を培ってもらうことと設定しています。具体的には、この力は、問題発見能力、仮説設定能力、データ分析能力、ロジックをつなげる能力、分かりやすくかつ論理的な文章を書く能力、図解力などに具現化されます。そしてこれらを展開するのに良い方法論の１つとして、量的研究で論文を書くという事だと思っています。宮崎ゼミでは、全員、量的研究で卒論を書いています。
片　野　智　治	５つの方針を提示した。　研究内容の公共性：単に個人的興味の追求でなく、公共性を持つこと。　研究の倫理：アンケートやインタビューで収集した個人情報に関し守秘義務を遂行すること。　内容としてはカウンセリング研究もしくは臨床心理研究関連とすること。　研究倫理との関連で、引用・参考文献を明記すること。　研究の進展状況にあわせて教員との個別面談をすること。もしくは「リサーチのサポートグループ」に参加すること。